ジョン・ダンのタイポロジーと「火薬陰謀事件」記念説教

高 橋 正 平

序

ジェームズ一世がイギリス王として即位した直後に王が政治と経済の両面で直面した事が2つあった。その一つは1605年11月5日の火薬陰謀事件で，これはカトリック教の過激派ジェズイットが国会議事堂爆破もろともジェームズ一世の殺害を狙った事件であった。事件は未遂に終わったが，ジェームズ一世はその後11月5日を記念日とし，様々な説教家がジェズイット糾弾の説教を行った。もう一つは火薬陰謀事件ほぼ1年後の1606年12月に本格的に始動したヴァージニア植民である。火薬陰謀事件記念説教では，陰謀事件と類似した事件を主として旧約聖書から探し，それを陰謀事件に適応し，事件からの王の奇跡的な救出と王への賛美そして事件首謀者を糾弾する。ヴァージニア植民についてもロンドン・ヴァージニア会社は著名な説教家に植民擁護の説教を行ってもらい，人々の関心をヴァージニア植民へ向けさせた。一方はジェームズ一世の命を狙った凶悪な事件で，他方はイギリスが抱えていた様々な社会的経済的な諸問題の打開策をヴァージニアに求めた植民であった。問題は両者に関わる説教である。ヴァージニア植民に関しては，新大陸ヴァージニア植民擁護の説教は聖書の一部をヴァージニア植民に「適応」し，植民の商業的性格を宗教的次元にまで高めている。説教家はそれぞれ異なる聖書の一部をヴァージニア植民に適応し，植民の目的，意義，合法性を聴衆に訴える。本論ではジェームズ一世王朝時の火薬陰謀事件記念説教とヴァージニア植民擁護の説教に共通した手法の「適応」に焦点をあてて，論を進めていきたい。「適応」という手法は聖書解釈の「タイポロジー」と関連性があり，これが具体的にどのように説教に使用されているかをジョン・ダンの火薬陰謀事件説教のなかに検証することとする。

1

聖書の適応は我々にすぐ「タイポロジー」(typology)という聖書解釈を思い出させる。これは「旧約」と「新約」の相関性，一貫性を認めつつ，「旧約」は「新約」の「予表」であると考える。「旧約」の記述は，神によってあらかじめ定められたことであり，それが「新約」においてより完全に成就される「型」として解釈する。つまり，「新約」の人物，事件等はすべて「旧約」に見られるという考えに立つ聖書解釈である。パウロは，ローマ人の手紙5章14節においてアダムを「来るべき者（キリスト）の予型」と解釈している。ヘブル書で言われているように，“a shadow of good things to come”（Heb:10:1）としての“type”（予型）が旧約にあり，その“antitype”（対型）が新約にあると考える。たとえばDavid王がキリストの「予表」となり，Isaacの生贄やくじらの腹の中のJonahやライオンの洞穴の中のDanielがキリストの生，死，復活の予表となる。タイポロジーは本来は旧約の人

物，出来事と新約の関連性を見出し，旧約に記されていることが新約で成就されていると考える。ブルトマンの言葉を借りれば，タイポロジーとは「旧約聖書が報告している人物，出来事，あるいは制度の中に，イエス・キリストの到来によって開始された救済の時が持つそれらに対応する人物，出来事あるいは制度の「予めの写し」「前もっての叙述」を見出す解釈である[1]。つまり旧約聖書のすべては，新約聖書の「予表」もしくは前兆なのである。旧約のイスラエルは，世界を千年王国へと導くべく運命づけられた国家や国民の予表となるのである。このような予表論的聖書解釈がいかに実践されてきたかについては様々な研究があるが，特に16－17世紀にはこの聖書解釈がしばしば使用されていた。ダンはタイポロジー的聖書解釈に熟知していたことは彼の多くの説教，散文，宗教詩が雄弁に物語っている。以下にダンのタイポロジー聖書解釈を検証し，ダンがいかにタイポロジーを扱っているかを検討していく。私の本論における意図はダンはタイポロジー的聖書解釈を火薬陰謀事件記念説教に「適応」したということである。

ダンは膨大な説教集の随所で「旧約」と「新約」を縦横無尽に扱い，所々でタイポロジーに触れて，説教を行っている。「旧約」の一節を論じながら「新約」を援用し，また逆に「新約」を論じながら「旧約」をも論じている。ダンは聖書解釈についてある説教で次のように言っている。

The literall sense is alwayes to be preserved; but the literall sense is not alwayes to be discerned: for the literall sense is not alwayes that, which the very Letter and Grammer of the place presents, as where it is literally said, *That Christ is a Vine*, and literally, *That his flesh is bread*, and literally, *That the new Ierusalem is thus situated, thus built, thus furnished*: But the literall sense of every place, is the principall intention of the Holy Ghost, in that place: And his principall intention in many places, is to expresse things by allegories, by figures; so that in many places of Scripture, a figurative sense is the literall sense, and more in this book [Revelation] then in any other.[2]

ここでダンは聖書の字義通りの解釈を認めつつもアレゴリーや象徴による解釈をも容認し，「聖書の多くの箇所においては比喩的意味が字義通りの意味である。」とさえ言っている。これはアウグスティヌスの「旧約聖書におさめられているすべて，あるいはほとんどの行動は，文字通りにだけでなく，比喩的にも受取らなければならない。」[3]（『キリスト教の教え』から影響を受けた言葉であろう。ダンはある説教でアウグスティヌスの "Figura nihil probat" を引用し，それを "A figure, an Allegory proves nothing"[4] と英訳している。"figura" の訳語は "figure" である。とすれば「比喩的」という言葉は文字通り「比喩的」の意味ではなく，「予型論」をも含む解釈である。[5] とすれば上記のダンの「比喩的意味」(figurative sense) の "figurative" にも「予型論的」の意味に解釈することが出来る。ダンが使用している "figure" はアウグスティヌスが使っている "figura" の訳語であろう。重要なことは，ダンは上記引用の聖書解釈に関して，タイポロジー的な聖書解釈を自ら認めているのではないかということである。また，ダンは1624年自らの危篤状態の中で書いた『危篤時における祈り』(*Devotions upon Emergent Occasions*) でも聖書解釈について次のよう

に言っている。

My *God*, my *God*, Thou art a *direct God*, may I not say, a *literall God*, a *God* that wouldest bee understood *literally*, and according to the *plaine sense* of all that thou saiest? But thou art....thou art a *figurative*, a *metaphoricall God* too: A *God* in whose words there is such a height of *figures*, such *voyages*, such *peregrinations* to fetch remote and precious *metaphors*, such *extentions*, such *spreadings*, such *Curtaines of Allegories*, such *third Heavens* of *Hyperbples*, so *harmonious eloquutions*, so *retired* and *reserved expressions*, so *commanding perswasions*, so *perswading commandements*, such *sinewes* even in thy *milke*, and such *things* in thy *words*, as all *prophane Authors*, seeme of the seed of the *Serpent*, that *creepes*.[6]

ここでもダンは "literall God" と "figurative, metaphoricall God" の両方を認め，上記の説教と同様，2種類の聖書解釈について論じている。「字義通りの神」と「比喩的な神」である。上記の "a height of figures" であるが，この figures はコンテクストからは「象徴」であろうが，これまでみたダンの "figure" の使い方を考えると，この語にも「予型」の意味があろう。つまり，ダンは「予型的聖書解釈論」をも十分意識しているのである。ダンは，聖職に就任する前の1615年『神学論集』を書いたが，そこでアウグスティヌスの言葉を借りて，"...it [Bible] hath this common with other books, that the words signifie things; but hath this particular, that all the things signifie other things." と言っている。[7]「言葉が物を意味し，物は他の物を意味する」とは，比喩的な聖書解釈を言っているが，これに予型的解釈をも含めることは可能であろう。

ダンはこのように聖書解釈について，字義通りの解釈以外にも比喩的な解釈をも認めている。アウグスティヌスの影響が大きいようであるが，その比喩的解釈にダンは予型論的聖書解釈をも含めている。ではダンはいかにしてタイポロジーを説教集で扱っているかを次に詳細に見てみたい。

2

ダンのタイポロジーに対する基本的態度は詩篇38章４節の「わたしの不義はわたしの頭を越え，重荷のように重くて負うことができません。」についての以下の言葉に明確に述べられている。

First then, all these things [they (David's iniquities) are gone over my head and they are a heavy burden, too heavy for me.] are *literally* spoken of *David*; By *application*, of us; and by *figure*, of Christ. *Historically*, David; *morally*, we; *Typically*, Christ is the subject of this text.[8]

上記の一節は「文字通り」には David について，「適応」によってすべての人間について，「予型」によってキリストについて語られている，とダンは言う。最後に「予表的にはキリストが本文の主題である」とダンは述べるが，ここでダンはっきりとタイポロジカルな聖書解釈に触れ，「旧約」詩篇の「予型」としての David は「新約」のキリストの「対

型」と対応していることを示している。旧約の David はキリストの「予表」として説明されているわけである。更に，ダンは言葉を続けて David の言葉は彼のみにあてはまる言葉ではなく，我々すべてに言えることを預言的に述べているという。

Though this will be a good rule, for the most part, in all *Davids* confessions and lamentations, that though that be always literally true of himself, for the *sinne*, or for the punishment, which he says, *personally David* did suffer, that which he complains of in the *Psalms*, in a great measure, yet *David* speaks *prophetically*, as well as *personally*, and to us, who exceed him in his sins, the exaltation of those miseries, which we finde so often in this book, are especially intended; That which David relates to have been his own case, he forsees will be ours too, in a higher degree.[9]

ダンは「詩篇」の David から Christ へ，そしてすべての人々へと David の一節をタイポロジカルに適応する。ここで重要なことは「予型」としての David と「対型」としての Christ の他にダンはさらに人々一般にも「詩篇」を適応しているということである。これについては後述するが，本来は旧約と新約との関係というタイポロジーが一般的に利用され，もともとのタイポロジーが異なる形で利用されているのである。ピューリタンは特にタイポロジーを社会的・政治的に利用し，自らの革命の正当化を主張したが，ダンはここで David の一節を同時代の人々にも適応していることに注目したい。

ダンは同じ詩篇38章３節の「あなたの怒りによって，わたしの肉には全きところなく，わたしの罪によってわたしの骨には健やかなところはありません。」についての説教のなかでも上記と同様のことを言っている。

Which words [There is no soundnesse in my flesh, because of thine anger, neither is there any rest in my bones, because of my sinne.] we shall first consider, as they are our present object, as they are historically, and literally to be understood of *David*; And secondly, in their *retrospect*, as they look back upon the first *Adam*, and so consern *Mankind collectively*, and so *you* and *I*, and all have our portion in these calamities; And thirdly, we shall consider them in their *prospect*, in their future relation to the *second Adam*, in *Christ Jesus*, in whom also all mankind was collected, and the calamities of all men had their Ocean and their confluence, and the cause of them, the anger of God was more declared, and and the cause of that anger, that is sin, did more abound, for the sins of all the world were *his*, by imputation;[10]

ダンはここで詩編の一節の歴史的・文字通りの解釈，David と Adam，人類との関係，更には David の「対型」としての "the second Adam" = "Christ" にまで論を展開している。この一節を個人的な問題を扱っていると解釈する人もいれば普遍的な問題と見る人もいればまた予言的にキリストに言及していると考える人もいる。ダンはこのように聖書の解釈にあたって，予型としての「旧約」と対型としての「新約」のタイポロジー的解釈を説教の至る所で行っているが，これはダンがいかにタイポロジーに熟知していたかを示し

ている。ダンは聖書の予表論的解釈についてアウグスティヌスを引用して次のように言っている。

It is true that S. *Augustine* sayes, *Figura nihil probat*, A figure, an Allegory proves nothing, yet, sayes he, *addit lucem, & ornat*, It makes that which is true in it selfe, more evident and more acceptable.[11]

予型やアレゴリーは何も証明しないが，それ自体で真なることがより明白になり，受け入れられるようになる，とダンは言い，決して象徴的聖書解釈を否定はしない。むしろその解釈により，聖書の記述がより理解できるようになるというのである。ダンのタイポロジー的聖書解釈の例を同じく詩編のDavidに関する一節から引いておこう。詩編38章2節の「あなたの矢はわたしを射抜き，御手はわたしを押さえつけています。」についての説教で，ダンは詩編の他の「矢」に関する章についても言及し，この「矢」が病気や良心の苦痛やあるいはDavid自身の激しい悲しみを表すと言われるが，これらの解釈に異を唱え，次のように言う。

But these *Psalmes* were made, not onely to vent *Davids* present holy passion, but to serve the Church of God, to the worlds end. And therefore, change the person, and wee shall finde a whole quiver of arrows. Extend this *Man*, to all *Mankind*; carry *Davids* History up to *Adams* History, and consider us in that state, which wee inherit from *him*, and we shall see *arrows* fly about our ears.[12]

ダンは，DavidをAdamや全人類にまで拡大し，David自身に関わる「矢」とは見なしていない。Adamの子孫である我々にまで問題を広げ，適応しているのである。Davidの「矢」はAdamnの「矢」でもあり，その子孫の全人類の「矢」でもある。ここでは「旧約」の「予型」に対する「新約」の「対型」とはなっていないが，「旧約」の「予型」をダンの時代のすべての人々に適応している点において，ヴァージニア説教の手法を思い起こさせるものである。タイポロジーはすでに述べたが，本来は「旧約」の人物，事件，制度に対応するものを「新約」の中に見出す聖書解釈である。「旧約」のイスラエル人の歴史を「予型」とし，それが「対型」として「新約」のなかに見出されるとする。言葉を代えて言えば，「旧約」が「新約」において完成されることを意味する。「旧約」におけるキリストの「対型」としてのDavidが「新約」ではキリストとなり，「旧約」の「予型」が「新約」で完成されることになる。「新約」で述べられていることはすべて「旧約」ですでに述べられているのである。「旧約」と「新約」との歴史的な関係がタイポロジーでは重要となる。ダンは純粋に「旧約」と「新約」の関連性をタイポロジカルに論ずる場合と更にダンの時代に「旧約」，「新約」を拡大して，適応する。この手法はダンに限らず17世紀では極めて自然に使用された手法であるが，火薬陰謀事件記念説教の手法を解く重要な鍵となる。

ダンはまた旧約のSolomonをタイポロジカルに新訳のChristと結び付けている。

First then, behold your selves in that first glasse, *Behold King Solomon*; *Solomon* the

sonne of *David*, but not the Son of *Bathsheba*, but of a better mother, the most blessed *Virgin Mary*. For, *Solomon*, in this text, is not a *proper* Name, but an *Appellative*; a significative word: *Solomon* is *pacificus*, the *Peacemaker*, and our peace is made in, and by Christ Jesus: and he is that *Solomon*, whom we are called upon to see here.[13]

Solomon は，ヘブライ語で平和を意味する。世界の平和はキリストによってもたらされたから，キリストは Solomon である。「予型」としての Solomon が「対型」としてのキリストに見出される。ダンは，このようにキリストを「旧約」の人物の Solomon の「予型」として見るが，この他にもダンは「予型」として，様々な人物を挙げる。例えば「予型」としての Jehovah である。

Now that which *Jehovah* was to *David*, *Jesus* is to us. Man in generall hath relation to God, as he is *Jehovah*, Being; We have relation to Christ, as he is *Jesus*, our Salvation; Salvation is our Being, *Jesus* is our *Jehovah*.[14]

Jehovah と David の関係をダンはキリストと我々の関係としてみる。神は Jehovah であるから人間は神と関係する。我々がキリストと関係するのはキリストが我々の救済，Jesus であるからである。救済は我々の「存在」（神）によるから，「存在」（神）という点において，Jesus は我々の Jehovah となるという三段論法である。あるいは，ダンは，救世主メシア待望について述べられたイザヤ書で言及されている救世主の名「助言者，驚くべき指導者，平和の君」をキリストは生まれつき持っていたと言う。

All those names which he [the Anointed] had in *Isaiah*, *The Counsellor*, *The Wonderful*, *The Prince of Peace*, and the name of *Iehovah*,...Christ had by nature;[15]

「旧約」の「予型」がキリストの「対型」に対応され，メシア待望がキリストにおいて成就されていることをダンは示唆する。次の一節では，ダンは Jacob をキリストの「予型」と見なしている。Jacob はヨルダン川を渡ったこと，及び祖国から追放されたこと，これらはいずれもキリストがヨルダン川を超えたこととヘロデ王からの難を逃れるエジプトへの追放の「予型」となっている。Jacob はキリストの "figure"(type) となる。

Jacob had concluded it out of the contemplation of his former, and present state; first he had been bansihed from his Countrey, *I came over* Jordan; Herein he was a figure of Christ; he received a blessing from his father, and presently he must go into banishment; Christ received presents and adoration from the Magi of the east, and presently he submits himself to a banishment in *Egypt*, for the danger that *Herod* intended.[16]

ダンは，また，Isaac とキリストをタイポロジー的に見ている。ダンは，Isaac が掘った井戸を「命の水の井戸」と解釈し，Abraham が最初 Adam にこの「水」を注ぎ，Adam の子孫たる人類はこの「水」を Adam の罪のために汚されているが我々は引き継いでいる。

その汚された「命の水の井戸」を再び掘り起こしたのはキリストであり，キリストが救済の手段を人類に再度与えてくれるのである。

...perchance in every one of our soules, there is this Well of the water of life [Isaac digged], and power to open it;...In all us, as wee are naturall men, there is this Well of water of Life, *Abraham* digged it at first, The Father of the faithfull our heavenly *Abraham*, infused it into us all at first in Adam, from whom, as wee have the Image of God, though defaced, so we have this Well of water though stopped up;...but *Isaac* diggs them againe, *Isaac* who is *Filius laetitiae*, the Son of Joy, our *Isaac*, our Jesus, he opens them againe, to all that receive him according to his Ordinance in his Church, he hath given this power, of keeping open in themselves, this Well of Life, these meanes of Salvation:[17]

ペリシテ人がふさいでしまった井戸を掘り返したIsaacは，いわば人々に命の糧である水を与えたことになる。Isaacを「予型」として見れば「新約」の「対型」はキリストとなる。キリストもIsaac同様，罪に汚れた人間の「命の水」を自らの死によって再びよみがえさせたからである。Isaacの井戸はキリストの贖いとなる。ここで，「旧約」の「予型」Isaacが「新約」のキリストに「対型」を見出すことになる。

ダンは，Mosesとキリストのタイポロジーについては以下のように述べる。

Moses who in his *Exodus* had *prefigured* this *issue of our Lord*, and in passing *Israel* out of *Egypt* through the *red Sea*, had foretold in that actual *prophesie*, *Christ passing* of *mankind through* the *sea* of his *blood*, and *Elias*, whose *Exodus* and *issue out of* this *world* was a *figure* of *Christs ascention*, had no doubt a great satisfaction in *tailking* with our *blessed Lord* ...of the *full consummation* of *all this* in *his death*, which was to bee *accomplished* at *Jerusalem*.[18]

Mosesは以下の点でキリストの「予型」となる。Mosesは，イスラエル人を引き連れてエジプトから紅海を経て彼らを救出した。キリストは十字架上の「血の赤い海」を経て人類を永遠の生命に導いた。両者とも「赤い海」を経ることにより人々を救出した。その意味においてMosesはキリストの「予型」となる。更に，Eliahがこの世から脱出したことはキリスト昇天の「予表」(figure)となっている。ダンはMosesだけでなくEliahをもキリストの「予型」としていることがわかる。

ダンは以上見てきたように「旧約」の様々な人物を「予型」としてその「対型」を「新約」のキリストに見出している。これは本来のタイポロジーである。説教集を読むとキリストの予型は「旧約」の至る所にあるとダンが言っているのを我々は知る。例えば次の一節はどうか。

Christ himselfe, as he hath an eternall generation, is *verbum Dei*, Himselfe is the Word of God; And as he hath a humane Generation, he is *subjectum verbi Dei*, the subject of the Word of God, of all the Scriptures, of all that was shadowed in the Types, and figur'd in the Ceremonies, and prepared in the preventions of the Law, of all that was foretold by

the Prophets, of all that the Soule of men rejoyced in, and congratulated with the Spirit of God, in the *Psalms*, and in the *Canticles*, and in the cheerefull parts of spirituall joy and exultation, which we have in the Scriptures;[19]

儀式，律法，詩編，雅歌等にキリストの予表は見られるのである。この一節を見る限りダンにとって予表論的聖書解釈が極めて重要であったことが理解できる。そして興味深いのは概して言えば，「新約」が「旧約」の完成であると見なしていることである。「旧約」はキリストの「影」である。その影を取り除き，はっきりとした形を示すのが「新約」なのである。あくまでも「旧約」は神が具体的な姿を示す土台であり，その土台を基に「新約」でキリストがヴェールを脱ぎ，その顔を見せるのである。

ダンはこの他にも Eve と Virgin Mary に「予型」と「対型」を見出している。説教集ではダンは「旧約」と「新約」を交互に論じ，聴衆に訴えているが，彼の説教方法にはタイポロジー的聖書解釈が重要な役割を果たしていることが理解できよう。

3

これまでは人物のなかにタイポロジーを見てきたが，聖書の出来事や制度についてのタイポロジーを次に検討してみたい。

ダンはキリストが成した偉業と彼の12人の弟子について次のように言う。

First, Christ having a greater, a fairer Jerusalem to build then *Davids* was, a greater Kingdome to establish then Juda's was, a greater Temple to build then *Solomons* was, having a greater work to raise, yet he begun upon a lesse ground; He is come from his twelve Tribes, that afforded armies in swarmes, to twelve persons, twelve Apostles;[20]

この一節から我々はダンの「旧約」と「新約」に対する態度を知る。つまりタイポロジー的な聖書解釈における「旧約」と「新約」の関係である。タイポロジーでは「新約」の記述は既に「旧約」に見られるという見解が基本的であるが，そのさい重要なことは「旧約」の歴史が「新約」において完成・成就と見る場合，「旧約」と「新約」の優劣の問題が生じてくるのである。「旧約」において「不完全に」記述されていることが，「新約」でより具体的に，より完全に姿を表す。不十分なことが完全になるという考えには当然「新約」が「旧約」よりすぐれた記述であるという見解に至る。ダンは，既に見た「旧約」の人物と「新約」のキリストとの関係において，キリストが「旧約」の人物より優れているとは言っていなかった。ところが，上記の一節でダンははっきりと比較級を使用して，キリストが「旧約」の David のエルサレムや Juda の王国や Solomon の神殿より「すぐれた」ことを成し遂げたと言っているのである。さらにタイポロジー的に見た場合に重要なのはキリストの12人の弟子とイスラエルの12の部族の関係である。キリストはイスラエルの12の部族の出であり，その12の部族がキリストの12人の弟子と関係してくる。12の部族は多くの軍勢を12人の弟子の与えた，とダンは言うが，なぜキリストの弟子が12人なのかが「旧約」のイスラエルの12人の部族から説明されている。上記の引用文でダンはキリストには Solomon の神殿より優れた神殿があったと言っているが，Temple と Church についてダン

は以下のように述べている。

Now, we cannot see our own face, without a glasse: and therfore in the old Temple, *In, or about that laver of brasse*, where the water, for the uses of the Church was reserved, *Moses* appointed *looking-glasses* to be placed; that so, at the entring into the Temple, men might see themselves, and make use of that water, if they had contracted any foulnesse, an any part about them. Here, at your coming hither now, you have *two glasses*, wherein you may see your selves from head to foot; One in the text, your *Head, Christ Jesus*, represented unto you, in the name and person of *Solomon, Behold King Solomon crowned, ec.* And another, under your feet, in the dissolution of this great *Monarch*, our *Royall Master*, now layed lower by death then any of us, his Subjects and servants.[21]

この一節でダンは重要な二点について言及している。その一点は「旧約」の「神殿」と「新約」の「教会」との関係である。「旧約」の「神殿」が「古い神殿」であるとすれば，「新約」の教会は「新しい神殿」に相当する。Moses は神殿に来る人々が顔を見ることが出来とように神殿に「鏡」を置いた。「新しい神殿」たる教会には Moses の鏡に対応するものがあるのか。それはキリストという「鏡」と亡くなったジェームズ一世という「鏡」である。「新しい神殿」に来る者はキリストとジェームズ一世によって自らを知るに至るのである。ここでダンは「古い神殿」の「対型」を「新しい神殿」即ち教会に見ている。この一節ではもう一つ重要なタイポロジーが言及されている。それは，既に述べた「予型」Solomon が「対型」キリストと対応しており，しかもキリストがジェームズ一世に適応されていることである。ジェームズ一世はいわばキリストの「影」として扱われている。「旧約」の神殿と教会の「基礎」についてダンはタイポロジー的解釈を行う。教会の基礎はキリストである。しかもそれは Solomon が築いた基礎である。パウロのエフェソの信徒への言葉の中にもエフェソの信徒達は預言者と使徒という土台の上に造られているとある。教会の基礎はキリストであるが，それはまた「旧約」をも基礎としている。では，「旧約」の「神殿」はどうか。

Besides these, it is sayed, in the building of the *Materiall Temple, The King commaunded, and they brought great Stones, amd costly Stones, and hewed Stones, to lay the foundations of the House;*[22]

下線部は歴代誌上５章17節からの引用であるが，これは文字通り神殿の基礎となった材料である。これらの材料の解釈についてダンは文字通りの意味の他に以下のような解釈をも行う。

So then, *Salomons* hewed Stones, and costly stones, may, in a faire accommodation, bee understood to bee the *Determinations*, and *Resolutions*, *Canons*, and *Decrees* of generall *Councels*:[23]

Solomonが命じた神殿の刻まれた石，高価な石は正しい適合では宗教会議の決意，決心，法規，法令として理解される。この「正しい適合」とは「適応」に近い意味を持っている。Solomonの命じた神殿は教会となり，その教会の基礎は宗教会議の様々な決議事項となっている。「予型」としてのSolomonの神殿と「対型」としての「教会」の関係がタイポロジー的に扱われている。

「紅海」と「キリストの血」についての予表論的解釈についてもダンは論じている。これについては既に一部言及したが，ダンは次のようにMosesの紅海脱出とキリストの「紅い血の海」を対応させている。

...hee [Christ], who had formerly passed his *Israel* thorough the *Red Sea*, as though that had not been *love* large enough, was now himself overflowed with a *Red Sea* of his owne bloud, for his *Israel* again.[24]

Mosesはイスラエル人をエジプトから紅海を渡り，彼らを「約束の地」へと導いた。キリストも迫害を免れるために紅海を経てエジプトに難を逃れた。その「紅海」はキリストの十字架上の「血の海」となってくる。このタイポロジーはダンにあって特異なものではなく，一般的なタイポロジーであったが，ダンはMosesの「紅海」とキリストの「血の海」を関係づけ，キリストの「血の海」の「予型」をMosesの「紅海」脱出に見ている。イスラエル人を救った「雲の柱」と「教会」についてはどうか。Mosesは主に対して，エジプトから「約束の地」への道を示してくれるようお願いする。それについてダンは次のように言う。

They did see that Pillar in which God was, and that presence, that Pillar shewed the way. To us, the Church is that Pillar; in that, God shewes us our way.[25]

イスラエル人にとっての神の導き手である「柱」が「新約」では「教会」となっている。神がダンに示す道は教会である。それが「柱」である。教会の基本的な事柄に関しては教会は固定しているが，重要でない，任意の事柄について教会は移動可能な柱である，とダンは言う。「旧約」では主は時には炎となり，時には雲となり，イスラエル人を「約束の地」へ導いたが，「新約」ではその「対型」が「教会」という真理の柱となっている。

「楽園」と教会の関係についてはダンは次のように言う。

We have in the Scriptures two speciall Types of the Church, *Paradise* and *the Arke*. But, in that Type, the *Arke*, we are principally instructed, what *the Church in generall* shall doe, and in that in *Paradise*, what *particular men in the Church should do*.[26]

ここでダンははっきりと教会の「予型」に"Types"という語を使い，ダンがタイポロジーに熟知していたことを示しているが，教会の「予型」として「楽園」と「ノアの箱船」が挙げられている。これも中世以来の伝統的な「予型」であるが，ダンは，教会は「箱船」の「予表」[The *Church* itselfe, (figured by the *Arke*)][27]であると明言する。また，「教会の

予型，箱船のなかで教会を考えよ」[28]とも言っている。

「ノアの洪水」と「洗礼」についてはどうか。ダンは Saint Basil と David を援用し，「洪水」と「洗礼」のタイポロジーに触れる。

...the greatest water of all, the *flood* it selfe, Saint *Basil* understands, and applies to *Baptisme*, as the Apostle [Peter] himselfe does, *Baptisme, was a figure*, of the *flood*,....*David* calls *Baptisme* the *flood*, because it destroyes all that was sinfull in us;[29]

ノアの洪水では主に従順なノア等は水を経ることにより救われ，罪は洗い流された。それと同じように教会の洗礼という水を経て人は罪を清められる。ペテロが言うように，洗礼は洪水の予表である。ダンはこのあとで次のように言う。

There was a *Brasen* Sea *in the Temple*; and there is a *golden Sea in the Church* of Christ, which is *Baptisterium*, the *font*, the *Sea*, into which God flings all their sinnes, who rightly, and effectually receive that Sacrament.[30]

ここでダンは Solomon が命じた水を入れる円形の鉢，「青銅の海」とキリスト教会の「黄金の海」，洗礼盤について触れている。上記ではノアの箱船は洗礼の予表となっており，「予型」と「対型」の関係が優劣の関係なく示されていたが，ここでは Solomon の神殿の「青銅の海」と教会の「黄金の海」との対比から，ダンがはっきりと後者が前者より優れていることを示唆している。神殿の水も教会の水も同じ水であるが，前者の水は人の罪とは関係のない水である。それに反し，後者，教会の水は人々の罪を洗い流してくれる。一方が「青銅」で，他方が「黄金」であることからも，ダンが後者の洗礼の水を神殿の水より価値があると認めていることは明らかである。洗礼についてダンは「割礼」にも洗礼の「予型」を見ている。「旧約」の割礼は「神とアブラハムとの間の契約の印」である。

しかし，キリスト教徒は外的儀式でしかない割礼ではなくキリストの割礼，すなわち洗礼によって救われる。「旧約」の割礼は「心の割礼」を予表するとダンは言う。

...the principall dignity of this Circumcision, was, that it was *Signum figurativum*, it prefigured, it directed to that Circumcision of the heart;[31]

「心の割礼」が洗礼を指していることは言うまでもない。「旧約」の割礼とキリストの割礼は以下のように比較される。

The Jewish Circumcision were an absurd and unreasonable thing, if it did not intimate and figure the Circumcision of the heart;[32]

ダンは，「旧約」の割礼が心の割礼を予表しなければそれはばかげた不合理なものであると言うが，ここでもダンは対型としての「新約」が予型の「旧約」より優れていると言っている。ダンは概して「新約」が「旧約」を完成させているとの考えを持っているようで

ある。福音と律法を比較した箇所でダンは，福音は律法と同様のよい基盤があり，「新約」は「旧約」と同様基盤はしっかりしている。しかし福音が神の声，神の忠実な声である。「旧約」も「新約」も神の声であることには変わりはないが，律法には「決定」と「終結」があるのに福音にはそれがないので，「新約」が「旧約」よりより忠実に守ることができると言っている。

...the Gospell is *fidelior*, the more faithfull, and the more sure, because that word, the Law, hath had a determination, an expiration, but the Gospell shall never have that.[33]

律法は断定的で上からの一方的な命令，指示であり，神への絶対的な服従を強いる。それに対し，福音には律法ほどの厳しい強制はない。むしろ他者の人間的な弱みを暖かく包んでくれる愛に満ちあふれている。ダンが言いたいのは，福音がより人間的なメッセージを我々に伝えているということであろう。そこが律法と福音の違いであり，そこに両者の優劣があるとダンは見ている。

エジプトにおけるイスラエル人の幽閉とキリスト教徒の殉教のタイポロジーについてはどうか。以下の引用から前者が後者の「予型」となっていることがわかる。

As after, in the *Christian Church*, he made the *bloud* of the *Martyrs*, the seed of the Church, so in *Egypt*, he propagated, and multiplied his Children, in the midst of their cruell oppressions, and slaughters, as though their *bloud* had been *seed* to encrease by; under the weight of their depressions, he gave them growth, and stature, and strength, as though their *wounds* had been *playsters*, and their *vexations cordials*;[34]

初期キリスト教会では迫害を受けた殉教者の血がその後のキリスト教会の礎となった。殉教者の血は教会の種子である。同様に，エジプトでのイスラエル人はエジプト人から迫害を受けたが主は依然として彼らを見捨てることなく，彼らの数を増やしていった。彼らが流した血は彼らが増えていく種子であった。キリスト教会の殉教者の流した血もエジプトでイスラエル人が流した血もいずれも無駄な血でなく，その後のキリスト教会，イルラエル人を更に強固なものにする糧であった。その意味で「旧約」のエジプトのイスラエル人は初期キリスト教会の殉教者の予型，予表となるのである。

次はSolomonの冠とキリストの冠である。ダンはジェームズ一世が亡くなった後，雅歌3章11節に基づいて説教を行った。それは「いでよ，シオンのおとめたちよ。ソロモン王を仰ぎ見よ。その冠を見よ。王の婚礼の日に，喜びの日に母君がいただかせた冠を。」である。ダンにとってはSolomonの冠はキリストの冠の予型となる。

And then lastly, the *person* upon whom they [daughters of Sion] are directed, is *Solomon* crowned, That is, Christ invested with the royall dignity of being *Head of the Church*; And in this especially, is this applyable to the occasion of our present meeting [James I's burial]...That this *Crown of Solomon* in the text, will appear to be Christs crown of *Thornes*, his *Humiliation*, his *Passion*;[35]

この一節は花嫁の行列を描いたもので，Solomonは王としてのSolomonでなく，花婿を指していると解釈されるが，ダンは文字通りSolomon王に言及していると考えているようである。これまで，キリストの予型としてのSolomonについては既に触れたが，ここではさらにSolomonの冠がキリストの冠と対応している。更にはSolomon→キリスト→ジェームズ一世という本来のタイポロジーがジェームズ一世にまで拡大され，ジェームズ一世はSolomon，キリストと並列されていることがわかる。ジェームズ一世の葬儀に際してダンは王をSolomon，キリストに適応し，ジェームズ一世への最大の賞賛を送るのである。

これまでダンのタイポロジー的聖書解釈を「旧約」と「新約」の人物，出来事，制度の対応のなかに見てきた。ダンは「対型」とか「予表」の語を表すときに“type”や“figure”を使用している。この語はタイポロジーで使用される用語で，ダンがいかにタイポロジーに関心を抱いていたかを示している。確かに「旧約」と「新約」という二つの聖書を考えた場合，両者の統一性，関連性は大きな問題であった。タイポロジーはこの問題の一つの解決であった。ダンの説教での聖書「適応」方法はタイポロジーにその発端があるのではないかとの仮説のもとに我々は論を進めてきた。次に検討すべきはこのポロジーがいかに具体的にダンの火薬陰謀事件で用いられているかである。

4

カトリック教徒過激派のジェズイットが1605年11月５日に起こしたいわゆる火薬陰謀未遂事件は国会議事堂爆破ともどもジェームズ一世とその家族及び政府の要人，宗教関係者を殺害しようとしたイギリス歴史上類をみない凶悪な事件であった。ジェームズ一世は事件後11月５日を記念日とし，事件を一般人に周知徹底させ併せて事件の風化を防ぐために著名な説教家に爆破未遂事件糾弾の説教を行わせた。説教家のなかで最も多くの説教を行った説教家はランスロット・アンドルーズ(Lancelot Andrewes)で，彼は1606年から1618年まで計10回の説教を行っている。[36] 1606年から1651年まで合計32編の火薬陰謀事件に関する説教があるが，ダンが記念説教を行ったのは1622年11月５日である。この説教は，「哀歌」４章20章についての説教で，火薬陰謀事件を非難すると同時に，又，ジェームズ一世王朝をも擁護するという火薬陰謀事件説教の定石に従っている。説教は，エレミアのエルサレム陥落と捕囚について書かれた「哀歌」を基にしているが，説教方法としてダンが使用したのはエルサレム陥落と捕囚をジェームズ一世の時代に適応し，ジェームズ一世王及び王国擁護する方法である。以下でその具体的適応を検証したい。

ダンが説教に選んだ聖書の一節は以下の旧約聖書「哀歌」４章20節であった。

The breath of our nostrils, the anointed of the Lord, was taken in their pits.（主の油注がれた者，わたしたちの命の息吹／そのひとが，彼らの罠に捕らえられた。）

この一節についての説教のポイントは「主の油注がれた者，わたしたちの命の息吹」とは誰か，「彼ら」とは誰か，「罠に捕らえられた」とはどのような意味か，である。ダンは，「哀歌」が書かれた歴史的背景からこれらを説明し，次にそれらをジェームズ一世の時代に

適応する。「主の油注がれた者」が誰を指すのかについては諸説があるが，ダンはそれをエジプト軍との戦いで非業の死をとげ，賢王と言われたユダ王国の王 Josiah（在位640－609BC）と解釈する。歴代誌下35章25節に「エレミアはヨシュアを悼んで哀歌を作った」とあるからである。他方「主の油注がれた者」をダンはバビロン捕囚の際のユダ王国の最後の王でバビロンで獄死した Zedekiah（在位：597－596）とも解釈している。「哀歌」4章17節で「今なお，わたしたちの目は援軍を求めていたずらに疲れ／救ってはくれない他国をなお見張って待つ。」とあり，これは Zedekiah がエジプトからの援軍を待っていることへの言及であるからで，ダンは特定はしないが「主の油注がれた者」を Zedekiah と解釈するのが妥当であろう。ではなぜダンは「主の油注がれた者」を Josiah と解釈したのか。それはジェームズ一世が1622年８月に出した「説教者への指令」（*Directions for Preachers*）で王が説教のテーマを国教会の39箇条と Edward 六世時に出版された説教書(the Book of Homilies)で扱われるテーマに制限したことと関係がある。その最初の説教書で著者の Thomas Cranmer が Edward 六世を "a new Josias" と呼んでいるのである。[37] ダンは，ジェームズ一世の「説教者への指令」を読んでおり，それを擁護する説教も行っているほどであるので，「新しい Josias」としての Edward 六世を知っていた。「哀歌」の「主の油注がれた者」を Josiah 王とダンが解釈した背景には以上のような理由があった。それに Josiah とすれば，彼はエジプト軍との戦いで死ぬが，「主の目にかなう正しいことを行い，父祖ダビデの道をそのまま歩み，右にも左にもそれなかった」(列王記下:22章２説)し，「彼(Josiha)のように全くモーゼの律法に従って，心を尽くし，魂を尽くし，力を尽くして主に立ち返った王は，彼の前にはなかった。彼の後にも，彼のような王が立つことはなかった。」（列王記下：23章25節）と称賛されている。「主の油注がれた者」を Josiah と解釈したほうがダンにとっては都合がよかった。それに「主の油注がれた者」を Zedekiah と解釈するとジェームズ一世との比較の際に不都合なことが生ずる。それは，Zedekiah が「主の目に悪とされることをことごく行った」と列王記（下24章19節）やエレミア書（52章２節）で記されているからである。ダンが「主の油注がれた者」を Josiah と解釈するのは以上の理由による。しかし，ダンは Zedekiah 説を捨てることはしない。Josiah が「善王」で Zedekiah が「悪王」でも王に変わりはなく，二人の王は「主の油注がれた者」，「命の息吹」即ち人々の命である，だから人々は「罠に捕らえられた」人を嘆かれなければならない，と言う。では，「彼ら」とはだれか。「主の油注がれた者」が Josiah であれば，「彼ら」は Josiah が戦ったエジプト王パロ・ネコ軍勢を指す。「罠に捕らえられた」とは，Josiah がネコに殺されたことを意味する。(列王記下：23章29節)「主の油注がれた者」，「命の息吹」が Zedekiah であれば「彼ら」はネブカドネザル軍勢を差し，「罠に捕らえられた」は Zedekiah 王のバビロン捕囚をさす。では，「主の油注がれた者」が「命の息吹」であるとはどのような意味か。「哀歌」の "the breath of our nostrils" は創世記２章７節の神がアダムに「命の息をその鼻に吹き入れられた」から来ているが，人間は神の「息」(この語 *Ruach* はまた「霊気」とも訳される。）により生きており，神の命が吹き込まれている。ダンは，この *Ruach* を文字通りに解釈して「*Ruach*, 霊気は我々が呼吸する息である，我々が生きる命である。王はその息であり，命であり，それ故息と命は王に属する。」[38] と言う。これは神の息がすべての命の根元であるように，人々の生活は王なくしては存在しえないことを表す。神が王となり，人々の王への無条件の服従がここから生まれてくる。「命の息吹」

としての王は地上における神の代理人となり，我々に神の祝福を伝える。「哀歌」4章20節のダンの文字通りの解釈は以上であるが，ダンはただそれだけでは終わらない。重要な点は「哀歌」4章20節の火薬陰謀事件への適応である。

5

ダンの説教がジェズイットが企てた火薬陰謀事件記念説教であることを考慮すれば，当然のことながら「哀歌」の一節と火薬陰謀事件との関係が問題となってくる。ダンは，「哀歌」4章20節を火薬陰謀事件に「適応」する。この「適応」によれば「主の油注がれた者」「わたしたちの命の息吹」は当然のことながらジェームズ一世を指すことになる。「わたしたち」はイギリス国民である。そして「かれらの罠に捕らえられた」とはジェームズ一世がカトリック教徒の火薬陰謀事件に巻き込まれたことを意味する。ダンは次のように「哀歌」の一節をジェームズ一世の時代に適応する。

...and all they [Lamentations, and Mournings, and Woe] are written *within*, and *without*, says the Text [Ezek.2.10] there; *within*, as they concern the *Iews*, *without*, as they are appliable to us; And they concern the *Iews*, *Historically*...and they concern them *prophetically*, for farther attempts *Ieremy* did certainly *foresee*. They are appliable to us both ways too: *Historically*, because we have seen, what they *would have done*, And *Prophetically*, because wee foresee what they *would doe*.[39]

ここでダンが "appliable" という語を使用していることに注目したい。ダンは「哀歌」をダンの時代及び火薬爆発陰謀事件に適応するのである。しかし，ジェームズ一世の予型として「哀歌」を考えた場合，困難が生じてくる。それはJosiah, Zedekiaとも「罠に捕らえられて」死んでいることである。ジェームズ一世は「罠」に捕らえられても助かったが，「旧約」では「主に油注がれた者」は死んでいる。これはどのように説明されるか。ダンは「罠に捕らえられた」という歴史の一場面よりはそれをイスラエルの復興という歴史の長いスパンのなかで見ているようである。確かに歴史的には，ユダ王国は「罠に捕らえられて」悲惨な状態に陥る。しかし，多くの危機を乗り越え，国は神の加護の下で繁栄を見ることになる。予言的には「哀歌」でエレミアは，エルサレム陥落は嘆いているが，他方でタイポロジー的にはキリスト亡き後のイスラエルへ降りかかるより大きな崩壊と荒廃をも嘆いているとダンは考える。これはエルサレム陥落が予型となってキリストの死がその対型となっている。人々の嘆きの原因は王国の崩壊である。しかし王国は神を基にして作られたものであるから，王国が崩壊することは神の崩壊にも等しい。ダンのユダ王国の擁護がジェームズ一世王国の擁護に至ることは自明である。Josiah王を論じる一方で，ダンは，巧みにジェームズ一世王国を背後に読みとらせている。更にダンはタイポロジー的な解釈を導入する。確かに王は敵の罠に落ちたが (he was fallen)，落ちた状態を続けるのではない。歴史的にはバビロン捕囚後イスラエル人はペルシア王キュロスによる釈放布告によって再び祖国へ帰還，祖国再建に励んだ。それ故，「落ちる」ことは「救出」を意味する。「落ちる」ことによって「救われる」のである。これは言うまでもなくキリストの死と復活を予表する。ダンはJosiahの「罠に落ちた」ことをキリストの死と復活に対応させている。だ

から「嘆き」は「祝福」となる。このようにダンはタイポロジー的聖書解釈を取り入れ，エルサレム陥落を嘆きとせずに，逆に「祝福」の契機とする。「罠に捕らえられた」結果としてのエルサレム陥落はジェームズ一世に適応すれば火薬陰謀事件である。王の殺害を狙ったこの事件はもし成功したら，イギリスは国家の頭を失うことになった。それはイギリス陥落にも等しい。しかし，バビロン捕囚後に祖国への帰還があったように，「罠に落ちた」後に「救出」があったように，火薬陰謀事件でも王殺害という危険があったが，それが未遂に終わりイギリスは「救出」された。バビロニア捕囚は火薬陰謀事件の予型となっている。

6

予型論的にバビロニア捕囚の対型が火薬陰謀事件となるが，更に，ダンはジェームズ一世王国を神の国とのタイポロジーの中に見ようとする。これはジェームズ一世王朝に対する揺るぎのないダンの支持・擁護となり，この説教では最も重要な点である。ダンは，王の予型は神である，と明言する。

Of all things that are, there *was* an *Idea* in God; there was a modell, a platform, an examplar of everything, which God produced and created in Time, in the mind and purpose of God before; Of all things God *had* an *Idea*, a preconception; but of Monarchy, of Kingdome, God, who is but one, *is* the *Idea*; God himselfe, in his Unity, *is* the Modell, He *is* the Type of *Monarchy*.[40]

神は地上の王国の「予型」である。しかもその王国には一人の統治者しかいない。

All forms of Government have one and the same *Soul*, that is, *Soveraignty*; That resides somewhere in every form; and this Soveraignty is in them all, from one and the same *Root*, from the *Lord of Lords*, from *God* himself, for *all Power is of God*;[41]

この一節で王の絶対権力，神聖さが雄弁に語られ，王権神授説を唱えるジェームズ一世を強力に援護する。王国のモデルは神であり，「神によらない権威はない」とさえ言う。更に，ダンは神と王国の関係を述べ，神は王国の「予型」であると言明する。

All formes of Government have this Soule, but God infuseth it more manifestly, and more effectually, in that forme, in a *Kingdome*: ... All governments may justly represent God to mee, who is the God of Order, and fountaine of all government, but yet I am more eased, and more accustomed to the contemplation of *Heaven*, in the *notion*, as *Heaven is a kingdome*, by having been borne, and bred in a Monarchy: God is a Type of that,...[42]

現世の王国の予型は神であり，これは現世の王国は神を表すという意味に他ならない。ダンは個人的にエリザベス女王とジェームズ一世の王国に生まれ，育ったことにより，天国は王国であるという考えに安堵をおぼえ，その考え方に順応していると言っている。最

後にダンは「神は王国の予型である」と断言する。

ダンの王国賛美はこれだけではない。ダンによれば，王国は真に地上における最善の国家である。そして，象徴的には天国の最善の予表，予型である。[43] ダンがこれほどまでに王国を支持する説教は他には類を見ない。ダンからすれば神の王国の対型である地上の王国を破壊しようした火薬陰謀事件は神への反逆であり，神の王国の破壊にも通ずる行為である。丁度神の選民イスラエル人をバビロンに捕囚したネブカドネザルの行為が神に対する反逆であるのと同じである。それ故，王と王国の切断と王不在の王国の安寧を主張することは神の建物を揺るがし，解体することになる。王と王国は魂と肉体同様密接に関係し，切っても切り離せない関係にある。王を王国から取り除くことは王国の死を意味する。ダンは「哀歌」の一節によってジェームズ一世王朝のイギリスをもタイポロジー的に扱っており，ジェームズ一世王朝が直面した難題の解決を試みている。

「哀歌」4章20節は，イスラエル人のバビロニア捕囚が嘆きの対象であるが，とりわけ王 Josiah をエレミアは嘆いている。「良き王」である Josiah の死に際し，王国は致死的重傷を負い，外国の君主の属国になった。ダンはしきりに Josiah 王の善良さを強調するが，それもダンは Josiah 王をジェームズ一世の予型としているからである。ダンは，「我々の時代の Josiah に適応すれば」(if we apply it to the Josiah of our times)[44]という表現を度々使用するが，「我々の時代の Josiah」がジェームズ一世を指していることは言うまでもなく，この説教では Josiah としてのジェームズ一世は9回言及されている。ダンは，火薬陰謀事件記念説教での彼の任務は「哀歌」の一節を説教日に適応することであると言って，次のように言う。

Those men who intended us, this cause of lamentation this day, in the destruction of *our Josiah*, spared him not, because he was so, because he was a *Josiah*, because he was good; no, not because he was *good to them*, his benefits to them, had not mollified them, towards him.[45]

「我が Josiah」とはジェームズ一世であり，ジェームズ一世はカトリック教徒に対して良き王であったが，それがカトリック教徒の気持ちをなだめるには至らなかった。その王を殺害するとすれば人々にとってはどこに慰めを見つけ，誰が何が慰めの対象となるのか，と言う。ジェームズ一世は息子チャールズのスペイン王女との結婚によるスペインとの和平を希求し，カトリック教徒に対する誹謗・中傷を禁じていたが，その事情を察してかダンは反カトリック教の姿勢を前面に出さない。火薬陰謀事件を宗教的次元からではなく政治的な次元からとらえ，もっぱら事件をジェームズ一世の王としての権威への反旗として強調している。[46] いかにして国家の安定が維持されるか。火薬陰謀事件記念日に際し，ただカトリック教徒を非難するだけでは何の解決をももたらさない。むしろ地上における神の代理人たる王への忠誠によってこそ国の安定は維持される。王への忠誠なくしては国家はただ混乱に陥るだけである。ところがそのまさしき混乱を目論んだのがカトリック教徒であった。ダンが本説教で神に由来する王国，神の代理人たる王を強調し，王や王国はいかなる攻撃の対象となってはいけないことを力説するのはジェームズ一世とジェームズ一世王朝のためである。

...if they [the Gunpowder plotters] had removed our *Iosiah*, and his *Royall children*, and so, this form of government, *where*, or, *who*, or *what* had been an object of Consolation to us?[47]

過激なカトリック教徒達はジェームズ一世とその子供達及び政府・教会の要人殺害を計画したが，ダンにとって王なき王国は考えられない。エレミアがJosiah王の死を嘆いたように，もし王が火薬陰謀事件の犠牲者になっていたら，我々は王を嘆かなければならなかっただろう。しかし，幸いにも神の摂理により計画は無に帰し，ジェームズ一世は犠牲者となることはなかった。ダンは終始ジェームズ一世をこの説教で擁護するが，王なくしてイギリス国家の安定はありえないことを力説する。火薬陰謀事件記念説教ではカトリック教徒攻撃は控えられ，説教そのものはジェームズ一世の意向に沿う内容の説教となっている。しかし，ジェームズ一世がカトリック教徒が言うように「悪い王」Zedekiahであったらどうか。その場合でも我々は王を守らなければならない。なぜなら王を失うことには危険があり，嘆きが伴い，Zedekiah王の死に際しても「嘆き」があったからである。ジェームズ一世殺害を狙った過激派カトリック教徒はジェズイットであった。彼らはジェームズ一世の王権神授説に真っ向から反対し，民衆からの権力委譲としての王権説を信じていた。彼らの見解によれば王はただ民衆から権力を移譲されているにすぎない。これに反しジェームズ一世は王権の神からの由来を頑なに信奉し，たとえ王が悪王であろうとも悪王を神の人間への罰として受け入れねばならないとした。火薬陰謀事件の首謀者とジェームズ一世とでは王権に関しては全く異なっていた。ここではダンはジェズイットの王権論に反論し，悪王でも王であるという考えに立脚した主張をしている。このようにダンは「哀歌」4章20節を火薬陰謀事件記念説教の題材として，エルサレム陥落を扱うが，それをまたジェームズ一世の時代に適応し，ジェームズ一世を「哀歌」の悲劇の主人公Josiahに対応させている。王権，王国の擁護を全面的に取り上げ，Josiah王の死とZedekiah王のバビロン捕囚をジェームズ一世へのカトリック教徒の火薬陰謀事件の中にとらえ，タイポロジー的に解釈し，ジェームズ一世への全幅的な忠誠を表明している。

ここで看過できない重要な点がある。それは「哀歌」4章20章の「主の油注がれた者，わたしたちの命の息吹」としての王である。エレミアが嘆いている者がJosiahであれZedekiahであれ，その人物は「主の油注がれた者」(the Anointed of the Lord) であり，「わたしたちの命の息吹」(the Breath of our Nostrils) である。「油を注ぐ」とは王，祭司，預言者は特別な任務を得ることを意味する。「哀歌」の一節では，油を注がれた王は神からの特別な権威を授けられていることを示す。「油を注ぐ」ことは宗教的に一般人と区別するためだったが，「主の油注がれた者」と言えば当然我々は「イエス・キリスト」を思い起こす。キリストは文字通り「主の油注がれた者」であったからである。ダンは次のように言う。

An Anointed King...and he that is anoynted,...above his fellow Kings,...The anoynted of the Lord, who in this Text hath both those great names, *Meshiach Jehovah, Christus Domini*,...[48]

「油注がれた者」はメシアであり，その英訳がキリストである。ダンは，「哀歌」の「主

の油注がれた者」が誰であるかは限定していないが，エホバとキリストとを連想させていることは明白である。つまり，「哀歌」の「主の油注がれた者」はキリストの予型となっており，そしてそれがまたジェームズ一世に適応されるのである。この説教ではジェームズ一世はJosiah王の対型となっていたが，今度はキリストの対型ともなっていることに注目したい。「哀歌」の「油注がれた者が罠に捕らえられた」はJosiah王の死かZedekiah王のバビロン捕囚を指すが，対型としてはキリストの受難となり，それが更に政治的にジェームズ一世に適応され，カトリック教徒の火薬陰謀事件によるジェームズ一世殺害未遂事件に適応されているのである。それゆえJosiah (or Zedekiah)→Christ→James Iという図式が成立する。本来のタイポロジーとは異なる形で「旧約」がジェームズ一世に対型を見出している。この予型，対型には無理があることは確かである。なぜならJosiah王はエジプト人との戦いで死に，Zedekiahは捕囚先のバビロンで獄死しているからである。これに関してダンは詳細に論ずることはしないで，「彼らは（Josiah と Zedekiah）は捕らえられ，(ユダ王国には)連れ戻されなかった。彼らは二人とも死んだ。彼ら二人にあっては永遠の永久の嘆きの正当な理由があり，他の感情を働かせる余地は何もない。」[49]と言っている。そして，「哀歌」４章20節をジェームズ一世に移せ，と言う。

But transfer it [Lamentation 4.20] to *our Josiah* [James I], and then, *Hee was taken*, is, *Hee was but taken; God did not suffer his holy one to see Corruption*, nor God did not suffer his Anointed, to perish in this taking;[50]

ここでの "transfer" は「適応」に近い意味を持っていることは明らかである。JosiahやZedekiahとは異なり，ジェームズ一世は「捕らえられただけであり」「神は神の聖者が朽ち果てるのを，お許しにならないであろう。」（使徒行伝：２章27節）又，神は油注がれた者が捕らえられて死ぬことを許しはしなかった。ジェームズ一世は「罠に捕らえられた」が死ぬことはなかった。それは神の加護があったからである。だから嘆きは祝福となり，叫びが賛嘆となる。神はジェームズ一世を罠に捕らえさせたが，王を救出させたのである。

And by making his [God's] servant, and our Soveraigne, the blessed means of that discovery, and deliverance, he [God] hath directed us, in all apprehensions of dangers, to rely upon that *Wisdome*, in civill affaires, affaires of State, and upon that *Zeale*, in causes of Religion,...[51]

国内問題，国家問題では王の智恵，宗教問題では王の熱意に我々は依存しなければならない。王の智恵，熱意によって今後再度生ずるであろう国内の様々な問題を乗り切ることができる。過激なカトリック教徒と異なり，ジェームズ一世はあくまでも平和的手段に訴える。

If God had made him [our Josiah=James I] his *Rod*, to scourge others with Warres and Armies, we might be afraid, that when God had done his worke by him, he would *cast*

the rod in the fire; God doth not alwayes blesse those Instruments, who love blood, though they pretend his Glory. But since God hath made him *his Dove*, to flie over the world, with the Olive branch, with indeavours of Peace, in all places, as the Dove did, so he shall ever bring his Olive branch to the Arke, that is, endeavour onely such peace, as may advance the Church of God, and establish peace of Conscience in himself.[52]

この一節は "Peacemaker" としてのジェームズ一世の姿をよく表している。たとえ神が王に戦争や軍隊で他者を罰せさせてもジェームズ一世はそのむちを火中に投げ捨てると言う。むしろジェームズ一世はノアと同様オリーブの枝を箱船にもってくる人物である。後半でダンはタイポロジーを使用し，「旧約」のノアの鳩をジェームズ一世の予型としている。火薬陰謀事件を企てたカトリック教徒は平和とは無縁な人々である。「神の教会を促進し，心に良心の平和を確立する」ような平和にジェームズ一世は励むのである。ダンからすれば過激なカトリック教徒は平和を破壊する人達で，神からの祝福は受けることはない。

結　び

ダンは「哀歌」4章20節を巧みにジェームズ一世に適応する。その適応は Josiah や Zedekiah のジェームズ一世への適応のように無理な適応もあった。しかし，ダンは，Josiah (or Zedekiah) からキリスト，ジェームズ一世へと適応を続け，ジェームズ一世に対する全面的な支持の態度をここで表明している。結局，火薬陰謀事件のような国家転覆を図る事件を回避するにはどうすべきなのか。それは「神への忠誠」と「ジェームズ一世への忠誠」によるしか方法はない。ダンは説教の最後で，ジェームズ一世の背後での国民の悔い改めと統一を訴える。そしてジェームズ一世から宗教的及び世俗的な問題における方向性が国家と宗教の安全への方法として生まれてくるのである。[53] ジェームズ一世の聖と俗における指導性のもとで国家は安泰となるのである。

ダンの火薬陰謀事件記念説教の検討から我々は本来のタイポロジーとは異なるタイポロジー，「政治化されたタイポロジー」をダンがいかに利用していたかを見てきた。17世紀には普通であった聖書解釈の一つであるタイポロジーの「予型」としての「旧約」と「対型」としての「新約」との対応ではなく，ジェームズ一世の時代の人物や出来事に対型を見出すというタイポロジーをダンは使用し，「哀歌」に火薬陰謀事件の「予型」を見出した。言わばダンは，「旧約」を1605年11月5日のロンドンの国会議事堂爆発未遂事件に適応したのである。そして，過去の「旧約」の記述から現在の火薬陰謀事件を照らし合わせ，事件の不当性を指摘し，あわせてジェームズ一世及びイギリスの賛美・称賛・擁護に終始するのである。

タイポロジーは基本的には「旧約」と「新約」との関連性のなかに両書の統合を見ようとする。厳密に言えば歴史の繰り返しである。「旧約」で起こったことが「新約」で再度繰り返されるのである。ところが16世紀後半から17世紀を通じ，このタイポロジーが本来のタイポロジーから方向を変え，社会的・政治的に利用されることになる。歴史に名を残すような大人物，大事件にこのタイポロジーが適応されるに至る。エリザベス女王，ジェームズ一世，チャールズ一世，二世，ピューリタン革命，そして新大陸アメリカへ赴いた

ピューリタン達，これらすべてにタイポロジーが宗教人やダン，マーヴェル，ミルトン，ドライデン等の文人達によって利用されることになる。[54]エリザベス女王がJudith, Deborah, Joshuaに，ジェームズ一世がSolomonに，その息子ヘンリーはJosiaに，チャールズ一世はキリストに，クロムウェルはMoses, Gideon, Davidに，チャールズ二世はDavidに，それぞれ適応され，「旧約」の予型に対する対型が「新約」ではなく，当時代の人物に見出される。また，困難に直面したイギリスは旧約聖書のイスラエルに対応され，また，革命時代のピューリタンはエジプトのファラオの圧政から逃れるイスラエル人となり，アメリカへ渡ったピューリタンは神から約束された土地カナンへ向かう新しいイスラエル人となる。このようなタイポロジーをMinerは"politicized typology"と呼ぶが，[55]ダン自身もイギリスを「旧約」のイスラエルの対型とし，また，ジェームズ一世をSolomonの対型としている。いわば聖書をジェームズ一世時代のイギリスに適応したのである。「哀歌」4章20節についてのダンの説教から，ダンが本来のタイポロジー以外にも当時普通であった「政治化されたタイポロジー」を使用しているのを見てきた。ダンはこの説教で火薬陰謀事件を聖書によって糾弾すると同時に絶対君主としてのジェームズ一世の擁護表明をもしている。説教を聞いたジェームズ一世は説教が余りにも反カトリック教的であると言う理由で説教の出版を命令しなかった。[56]ジェームズ一世としては息子チャールズとスペイン王女との結婚を画策していた最中であり，いたずらに大国スペインを刺激することは望まなかったのである。いずれにせよダン自身は火薬陰謀事件記念説教で聖書を援用しながら十分に事件を糾弾し，ジェームズ一世を賞賛した。「哀歌」の適応には問題点がないわけではなかったが，説教家ダン自身としてはその務めを十分に果たしたと言えるであろう。

注

＊本論文は平成14年３月の科学研究費補助金（基盤研究（C）（２））研究成果報告書に加筆・修正を施したものである。

---

[1] ブルトマン著作集聖書学論文集 III 9 （東京：新教出版社，1994），p.3.

[2] G. R. Potter and E. M. Simpson eds.: *The Sermons of John Donne* (Berkeley: University of California Press, 1953-62), Vol.VI .p.62. 以下本論で使用するダンの説教はこの版による。

[3] アウグスティヌス著作集 6 （東京：教文館，1988），p.180.

[4] Vol. III. p.144.

[5] 出村彰・宮谷宣史編『聖書解釈の歴史』（東京：日本基督教団出版局，1986），p.191.

[6] John Donne: *Devotions upon Emergent Occasions* A. Raspa ed. (Montreal and London: McGill-Queen's University Press, 1975), p.99.

[7] John Donne: *Essays in Divinity* E. M. Simpson ed (Oxford: Oxford University Press, 1967), p.8.

[8] Vol. II. p.97.

[9] Vol. II. p.99.

[10] Vol. II. p.75.

[11] Vol. III. p.144.
[12] Vol. II. p.54.
[13] Vol. VI. p.286.
[14] Vol. V. p.326.
[15] Vol. V. p.327.
[16] Vol. I. pp.278-9.
[17] Vol. VII. pp.337-8.
[18] Vol. X. pp.244-5.
[19] Vol. I. pp.287-8.
[20] Vol. II. p.273.
[21] Vol. VI. p.286.
[22] Vol. VI. p.252.
[23] Vol. VI. p.253.
[24] Vol. II. p.140.
[25] Vol. IX. p.362.
[26] Vol. VII. p.423.
[27] Vol. VII. p.424.
[28] Vol. VI. p.155.
[29] Vol. V. p.110.
[30] Vol. V. p.110.
[31] Vol. VI. p.193.
[32] Vol. VI. p.193.
[33] Vol. I. p.286.
[34] Vol. V. pp.187-8.
[35] Vol. VI. pp.280-1.
[36] J. P. Wilson and J. Bliss eds.: *The Works of Lancelot Andrewes* (New York: AMS Press, 1967), Vol. IV 参照。
[37] John N. Wall, Jr. and T. B. Burgin, "This Sermon...upon the Gun-powder day": The Book of Homilies of 1547 and Donne's Sermon in Commemoration of Guy Fawkes' Day, 1622" (*South Atlantic Review* 49:2(1984), p.28.
[38] Vol. IV. p.251.
[39] Vol. IV. p.238.
[40] Vol. IV. p.240.
[41] Vol. IV. pp.240-1.
[42] Vol. IV. p.241.
[43] Vol. IV. p.243.
[44] Vol. IV. p.247.
[45] Vol. IV. p.248.
[46] Wall and Burgin, p.24.
[47] Vol. IV. p.248.
[48] Vol. IV. pp.257-8.
[49] Vol. IV. p.260.

[50] Vol. IV. p.260.

[51] Vol. IV. p.260.

[52] Vol. IV. p.261.

[53] Wall and Burgin, p.24.

[54] Steven N. Zwicker: *Dryden's Political Poetry* (Providence: Brown University Press, 1972) 参照。

[55] John Morrill et al eds.: *Public Duty and Private Conscience in Seventeenth-Century England: Essays Presented to G. E. Aylmer* (Oxford: Oxford University Press, 1993), p.90.

[56] Vol. IV. p.35.